

再発見 キャプテンとレフリー

19世紀前半、ラグビーが誕生した頃のフットボールのゲームを想像してください。自由奔放に戦う中でゲームの前に話し合っただけで決めた規則に違反するプレーヤー、乱暴な危険な行動に対して相手が文句言う場面がしばしば起きたことでしょう。その都度ゲームを中断して討論し当事者同士の話し合いで解決する場合もあれば、キャプテンの抗議へと拡大し、うまく解決すればよいのですがこじれる場合もあったことでしょう。ゲームを進めるのに険悪な空気や時間の浪費は禁物です。楽しむためのスポーツが争いの元になるのは望ましくないことです。

多くの意見が集約されてまとまったものをキャプテンがチームを代表してアピールし、それを受けて調停者が判断するという方法です。そこで導入されたのが Umpire (調停者・審判員) です。

1866年、ラグビースクールで行われていたフットボールの規則に、
“2 umpires must be provided.”
とあります。umpire と呼ばれていたことが分かります。umpire の仕事(duties)については特に記述されていませんでした。

1871年にRFUが設立されて、規則研究やゲーム統括をするようになりました。

1874年、RFUは次のように制定しました。
「両チームのキャプテンがいざこざに対する唯一の判定者である」

両キャプテンは通常ゲームの前に会合していくつかの点について意見交換したと付記されています。umpire と captain の関係は複雑なものがあったようです。

1875年、
「両キャプテンが判断が最終のものである」
と再び記述されています。

そして1881年、
「全てのゲームに、neutral umpire が指名される」
ということが記述されています。umpire は中立 neutral を確保することが定着していきました。

1885年に大きな進化が見られます。
「二人の umpire と一人の referee が指名されなければならない」
referee の導入です。umpire で解決しきれない場合が起り、もう一人審判が必要になったのです。
「referee は両チームの役員または captain の同意のもとに選ばれなくてはならない」とされました。当然のことながら中立の確保はもっとも重大事でした。

1890年には
「二人の umpires と二人のタッチジャッジと一人の referee を指名しなくてはならない」
タッチジャッジの導入です。グラウンド整備されるようになってタッチの判定が一段と厳格に規定されるようになりました。

1892年に大改革が見られます。
「referee 一人とタッチジャッジ二人を指名」することになりました。umpire が消えたということは大きな変化です。時代の大きな流れが理解することが出来ます。1844年にスコットランドとウェールズがumpire を指名しないでゲームするということはありましたが全体的にreferee だけでゲームが行われるようになりました。レフリーはお互いの同意を得ることが前提となり、そのことによってゲームが一段とスムーズになったとされています。

ここで umpire と referee の仕事 (duties) を整理しておきましょう。
umpire は一般的に審判員という意味です。球技ではball(field)umpire という言葉で使われます。referee は refer (委任する) という意味から使われる言葉で、判断を委任した・された人・・・審判員という意味で使われます。
umpire は杖 (stick) を所持し、referee は笛(whistle)を所持することが必要責務とされました。

1885年頃のゲームは次のように進行されていました。

ゲーム中一方のアピールに対して

umpire がアピールを受け入れるのであれば杖を上げる。杖を上げなければアピールを受け入れないということです。

- ① 一人の umpire が杖を上げ、もう一人の umpire が杖を上げない、両方でない場合は、
 - (a) レフリーが受け入れるのであれば杖を上げなかった umpire に話をせずに直ちに笛を吹いてゲームを止める
 - (b) レフリーが直ちに笛を吹かなかったらアピールを受け入れないということでゲームはアピールがなかったこの如く進行する
- ② 両方の umpire が杖を上げた場合はレフリーは特に考えがない限り笛を吹いてゲームは止める

1860～1890年代に至る間の referee の推移については今日も学ぶところが多くレフリングは永遠の課題です。

今日レフリングがプレーヤーにとっても不満の対象になり比較的になっていますが、現状を打開する方策のとしてはレフリングの研究だけでなくプレーヤーの意識改革も大切で、それらは車の両輪のごとく両方相まって先進するものです。

プレーヤーについては彼らの指導者の意識改革が必要です。指導者がラグビーに対する信念を持って勝利至上主義に走ることなく better rugby を目指して情熱を傾けることが求められています。正しい指導によって良い captain が育ちプレーヤーが成長していくのです。

2009年度のルールでは、「6.A.5 レフリーの決定に対するプレーヤーの反論」についても「レフリーの決定に反論してはならない」と高圧的でプレーヤーの思考を否定する指導は間違いで、根本はルールの精神を理解させなければなりません。

キャプテンは時には信念と自信を元にプレーしなければなりません。例えば絶対にレッドカード・イエローカードに当たることをしない、反則は1ゲーム5以下であるように心がける等平素の努力と練習時における工夫を述べてゲーム後の適当な機会にレフリーやルールの解釈について質問したり意見を聞いたりするぐらいの情熱と真面目が必要です。不満を残して不平を言ったりすることはよくありません。この信念と自信の無いキャプテンや指導者は失格です。

2010.07.19

西川 義行